

## 未発表資料 翻刻と解題

永瀬清子・坪田正男・坪田理基男書簡

―坪田譲治・宮沢賢治に触れて―

はじめに

山根 知子  
白根 直子

本稿は、現代詩の母と称せられる岡山出身の女性詩人永瀬清子（一九〇六年・一九九五年）が、同じく岡山出身の小説家・児童文学作家である坪田譲治（一八九〇年・一九八二年）の長男・坪田正男と三男・坪田理基男と交わした計八通の書簡について、翻刻と解題によって初公表し、これらの書簡研究からこれまで明らかにされていなかった文学的交流の解明に至ろうとするものである。

その文学的交流において明らかにしたいのは、次の諸要素である。まずは、これらの書簡研究から推測される永瀬清子の書簡以前の思いにおいて、宮沢賢治没後の普及に携わった生前の坪田譲治への認識があった点が考えられ、続いて同じふるさと岡山の自然と子どもを描く譲治作品への共感があったといえる

点である。さらに、坪田譲治没後に坪田遺族と交わされたこれらの書簡からは、永瀬清子が岡山市の制定する坪田譲治文学賞を、坪田遺族との協力のもとで支えていくとした点、譲治の長男・坪田正男と三男・坪田理基男によって譲治の文学的遺品が岡山市立中央図書館ならびに吉備路文学館に収められる動きへの永瀬清子の思いと関わりが確認できる点である。

加えて、これらの書簡と関連が深いノートルダム清心女子大学附属図書館「坪田譲治コレクション」所蔵の署名入り永瀬清子著作物四冊について明らかにし、書簡に記載された永瀬清子と坪田正男における女性の自由およびキリスト教への思いについても確認したい。

翻刻

凡例

・旧漢字は、固有名詞を除いて、新漢字にあらためた。  
 ・旧仮名遣いについてはそのままとした。

・判読し難い文字については□内にその旨を記した。  
 ・付記すべき事項については○内にその旨を記した。

【坪田正男あて永瀬清子書簡】 個人蔵  
 書簡 1 一九八四年三月五日

【消印】 岡山中央／84・3・5／18―24

【封書】 日本郵便六十円切手貼付

【筆記具】 黒インク

【封筒表面】 東京都豊島区西池袋二丁目（以下は略す）／坪田

正男様

【封筒裏面】 岡山市南方三丁目（以下は略す）（注<sup>1</sup>）／永瀬清子

三月五日

【用箋】 黄薔薇用箋 六枚

〈第一葉〉

坪田正男様（注<sup>2</sup>）

三月五日

丁度一年前に偶然にもお宅へお伺いしまして（注<sup>3</sup>）、しばらく

たのしいお話をいたしましたので其後お手紙をさしあげましょ  
 うと思いいいつのまにかこのように日がたつてしまいました  
 が「諸国の天女」の永瀬でございます（注<sup>4</sup>）

その時のことを私の出している「女人随筆」48（注<sup>5</sup>）にもす  
 こし書いていますのでそれをお送りしようとも思いますが何と  
 もいえず忙しく追われていたのと、お宅のアドレスがはつきり  
 なかったりしてついついこのありさまになりました ごめん  
 下さいませ。

実はそのあと六月末でしたが岡山の市立図書館（注<sup>6</sup>）が新築  
 できましたのでそのお祝いをかねて私に講演をたのまれその時  
 坪田譲治先生の御作品についてお話をしました。「子供の四季」  
 「風の中の子供」などについての私の感想でした。

あれやこれやとご縁がふかくなりながら、その上、

〈第二葉〉

ついこのあいだ二月二十七日には、市の方々が坪田譲治賞をき  
 めたいのでその相だんの会合に出てほしいと云われお伺いしま  
 した。

お手紙を書こうと思うといういろいろ長くなりそうでそのため又  
 ついついのばしてしまうということになりましたが、去年三月四

日にお伺いしたことが機縁になって、私は女の人の詩誌「ラ・メール」<sup>〔注7〕</sup>に「女波男波」を書き、又私の拙い著書にもそれを入れましたのでごらんに入れよう入れようとも思っていました。

なんだか云いわけばかりの手紙ですが、別便で小著「うぐいすの招き」「彩りの雲」と「女人随筆」をごらんにいたしますので<sup>〔注8〕</sup> およみただければまことに嬉しく存じます

「短章集」は詩を書くよりすこし気楽な気持で書きつづけ、それなりに本音もいくらか出ていようというもので「彩りの雲」はその第四集でございます もう一冊の散文集「うぐいすの招き」は日記のように書いていますのでつまらないものですが実は「女人随筆」に書きつづけていた

#### 〈第三葉〉

ものを集めました。一九八二年暮までのもので、引つづき「女人随筆」48号に書いたものも最後に入れようかと思ひながらすこし頁数が多くなりすぎてもと思ひやめました。

今から思うところ訪問のことを書いているそれも<sup>〔注9〕</sup>入れておけばよかったかと思つて居ります。

あなた様のクリスチャンについてのお考えは<sup>〔注10〕</sup> 私の考え

ていたことにたまたま合致していましたので興味ふかく存じました。

実は一昨年、岡山でも自由民権運動百年記念の集会有り、その時に女性の側からも明治の女性が自由民権にどのように対応したかをしらべようという話が出まして さしあたり岡山女子懇親会（明治十五年）について会員が手わけしてしらべ<sup>1982年</sup>の十一月三日の その集会の時会員が発表いたしました<sup>〔注11〕</sup>。そのグループは十四、五人のものです、それから引つづき去年は「岡山近代女性史研究会」<sup>〔注12〕</sup> という名にして、明治以後の岡山の女性の動きや仕事を各自でしらべて居ります。

#### 〈第四葉〉

（福田）景山英子<sup>〔注13〕</sup>、清水紫琴<sup>〔注14〕</sup>、など高名の人々もありますが、私は岡山教会と山陽英和女学校（現山陽学園）を創立するのに力のあつた女性大西絹さんを発掘したいと思ひやつと一稿だけできました。

大西絹さんはじめ、角谷小梅などクリスチャンとしてすぐれた女性が何人かあり、それに明治の時代に仕事をしました。大西絹は大西操山の叔母ですがあまり知られていないようです。又、最後は学校を上代淑さんにゆずり身を引きました。

私は幼い時金沢で大きくなり、岡山のことはあまり知りませ

んのです。こし苦勞でしたが、みんなでしらべあつて今年中には一冊にまとめたら、と思つています。

明治のはじめ女の人がキリスト教の影響をうけた時、新しい人生の見方を知り、立ちあがつたのを私はとてもよかつたと思つています。私はクリスチャンではありませんが。

男性が羽衣をかくそうとしたことは、ある程度いまでもつづいています。「彩りの雲」の中の「女波男波」はごく短いのですが、  
 〈第五葉〉

これからもすこし追求したいのと、但、女性が「男性と同権だ」ということをあまり狭く考えたくはない、というのが今の私の気持です。

いろいろお話したいと思つていたのですが、このあいだ理基男様おいでの時、一寸お目にかゝり、ほんのわずかごあいさつしただけでお別れしましたが、以上のとおりに思つていたのでついおいでのことを知りごあいさついたしました次第でした。

私の一番の仕事は自分の詩のことですが、女であるためいろいろのこと考えてみます。家庭のことも大事だったのですがどうやら苦勞しながら七、八十パーセントの山を越しました。あとわずかなうちにまだいろいろしたいことがあり、そのうち、

岡山の近代文学館が要ると思つて、みんなに（県、その他に）もいつもいつも呼びかけ云つていたのですが、それに多分お金も時も力量もかゝることなので、私の分を越えていると思ひ最近 はあきらめかけていました。いまひとりで坪田先生の記念のことがすゝんで来て、とてもうれしく思つています。

〈第六葉〉

そして私もその委員の中へお加えいただいていることをよろこんでいます

三月に入つてもかなり寒くて雪さへ降りおどろきましたが、今日はや、晴れて気持よろしく、早春らしい光です

書けば長くなると思つていたのですが、ご縁があればきっと又お目にかゝることもありましよう。

理基男様には突然だったのでお驚きでしたことと思いますが（注15）、あとでとても恥かしく思ひましたが何卒よろしくお伝えおき下さいませ。

乱筆のまゝですが、ごぶさたのおわびをかねてご様子申しあげます

どうかくれぐれもお大切に

永瀬清子

注1

清子は、岡山県赤磐郡豊田村松木（現・赤磐市松木）で生まれ、父の赴任のため金沢、名古屋に暮らし、結婚により大阪へ転居した。夫の転勤により東京に暮らすのが、夫は戦火から会社の書類を守るために岡山支店に転勤となり、一九四五年一月に清子の両親が買った岡山市の家に帰った。終戦後、松木の生家で農作業に従事し、一九六五年三月に岡山県世界連邦都市協議会事務局への通勤に便利な岡山市の家に転居する。以来清子は岡山市で暮らした。

2 坪田正男（一九一七年・一九九六年）は、譲治の長男。

3 清子は、自身の随筆「初対面と旧知―日々の紀行―」（『女人随筆』一九八三年四月）によると、一九八三年三月四日に東京・西池袋の正男氏を訪問し初対面している。その経緯は、清子が岡山から上京し、豊島区にある『婦人之友』を訪れ自由学園の明日館（一九二一年にフランク・ロイド・ライトの設計によって建てられた校舎）で迎えられた際、山室軍平の次女・山室徳子が敷地を案内するうちに明日館から五十メートルほどの坪田家の門前を通り、清子が「坪田先生の遺書や記念品を岡山市へご遺族がご寄贈下さる事になっているので感謝している旨を云うと」、徳子が「坪田さんへお立寄りなさったら、とすすめて下さった」こと

から実現したという。譲治が永眠した一九八二年七月の翌年三月にあたる本書簡時点までに坪田遺族が岡山市への寄贈の意向を伝えていたことについて、清子がすでに知っていたこともわかる。

譲治と自由学園を創設した羽仁もと子・吉一夫妻との関係については、それまで小説のみを手がけていた譲治が初めて童話として書いて発表した作品「正太の汽車」が、羽仁もと子・吉一夫妻の発行する雑誌『子供之友』（一九二六年一月）に掲載されており、これは鈴木三重吉主宰の児童文学雑誌『赤い鳥』発表の童話よりも先駆けている。その後も、譲治は『子供之友』に合計四作品の童話を掲載し、同じく羽仁夫妻が創刊した『婦人之友』には随筆八作品・小説一作品を寄稿し、座談会にも三回登場している。

一方、一九八三年三月四日の訪問以前において、現時点で確認できる清子の『婦人之友』への最初の寄稿は、一九八一年一月の随筆「新しい年の意味」である。以後、座談会「人間を育てるということ 一九八三年 新しい世界を描きながら……」（一九八三年一月）、詩「ふしぎな人」（一九八三年四月）がある。詩「ふしぎな人」は、日本青年館で開催される『婦人之友』創刊八十周年の祝賀大会の

ため、羽仁もと子を偲んで書いた詩で、祝賀大会では女優の岸田今日子により朗読された。

4 「諸国の天女」は、柳田國男の民俗学講座で日本全国に羽衣伝説があることを知り、天に帰らない天女もいるのではないかと考え、一九三九年一月に詩誌『四季』に発表した詩である。この詩は、一九四〇年八月に河出書房から刊行した第二詩集の表題作となった。前掲の随筆「初対面と旧知」によると、清子は初対面の正男からすぐに「永瀬清子さん」と云うのは、『諸国の天女』の詩人でしょう」と言われたことから、その認識を受けてこの書簡でも「『諸国の天女』の永瀬でございます」と述べている。この詩集について対面時の正男が「僕はあの詩集を戦前古本屋で買って愛読し、それから日本の女性の運命をずっと考えているのですよ」男性はつねに女性の羽衣をかくしたりもぎとったりしむけて来たのです」と述べたことと、それを聞いた清子が「思わぬ知己をみいだしてお話にさき入った」という思いになったことが、本書簡での話題につながっている。なお文面に直接登場してはいないが、清子の正男に対する共鳴には、両者が家庭裁判所関係の仕事経験からくる価値観について対話した可能性が考えられる。正男は大塚の兄

童相談所に勤めたあと民生局児童課に転勤し、その後東京家庭裁判所の調査官を務めた。清子は、一九五九年から岡山家庭裁判所調停委員を務めている。

5 随筆誌『女人随筆』一九八三年四月。

6 一九八三年四月二十七日に岡山市立中央図書館が開館し、翌五月二十九日に清子が講演会「読書のよろこび―坪田譲治先生を通じて」で「子供の四季」「風の中の子供」など譲治の作品について講演をした。

7 新川和江と吉原幸子が創刊した詩誌『現代詩ラ・メール』のこと。清子は新川和江から創刊号（一九八三年七月）に短章の執筆を依頼され、「女波男波」を寄稿した。これは、『彩りの雲 短章集4』（一九八四年一月 思潮社）に収録後、詩集『卑弥呼よ卑弥呼』（一九九〇年一月 手帖舎）に収録されている。

8 清子は、随筆集『うぐいすの招き』（一九八三年十一月 れんが書房新社）、短章集『彩りの雲』（一九八四年一月 思潮社）、随筆誌『女人随筆』（一九八三年四月）を送付している。『女人随筆』は、一九六八年九月、杉山千代の主宰するタブロイド紙『女の新聞』の後継誌として創刊した随筆誌。杉山千代の急逝により、一九六九年十二月発行

の『女人随筆』から清子が発行人となった。

清子が正男に送った『うぐいすの招き』と『彩りの雲』は、譲治が西池袋の自宅の庭に一九六一年七月に建て、正男・キネ子夫妻が運営した家庭文庫『びわのみ文庫』に保管されていた。正男夫妻の没後、二〇一〇年に『びわのみ文庫』の建物が解体される際に遺族から寄贈を受け、現在本学附属図書館「坪田譲治コレクション」に所蔵されている。『うぐいすの招き』には、「坪田正男様／永瀬清子／一九八四年早春」、『彩りの雲』には、短章「女波男波」から「男が夕ぐれをみるように／女も夕ぐれをみたかった／永瀬清子／坪田正男様」との署名が書き込まれている。

なお、「坪田譲治コレクション」には、「坪田正男様」とのあて名がある署名本が他に一冊あり、それは自選詩集『私は地球』（沖積舎 一九八三年一月）である。署名部分には、「坪田正男様／永瀬清子／一九八三年三月四日」とある。この日付は、本書簡の一年前に坪田家で初対面した日付と一致していることから、その対面場で署名をして渡したものと考えられる。

9 注5に同じ

10 前掲の清子の随筆「初対面と旧知」には、一年前の訪問

の際、正男が「自分はクリスチャンではないが日本の一夫一婦制はたしかにクリスチャンによって導入されたと思う。そして娼婦運動もすべてクリスト者によって興された」と語ったことが記されていることから、清子は本書簡で、正男のこうした意見を踏まえて発言している。そのとき正男が触れた「娼婦運動」については、岡山出身で日本人最初の救世軍士官となった山室軍平と妻・機恵子とが行なった娼婦運動を念頭に置いていることが、その夫妻の次女・山室徳子が清子を案内して側にいたことから意識されていると思われる。清子は、このとき正男と徳子との交流について知るが、同随筆では徳子の姉である「民子さんには岡山で一度お会いした事がある」と書いて、自身も長女・民子との接点があったことを伝えている。さらにこのようにクリスト教と人権意識に関心の高い山室家と坪田家とを意識し、清子は正男と民子とを「私たち三人とも岡山人」として親しみ深く把握している。

なお、坪田家におけるクリスト教信仰については、譲治と妻ナミ子には、ともにクリスチャンとして出会い新婚生活を始めたという経緯がある。譲治の洗礼は、早稲田大学在学中の一九二二年、二十二歳のとき三田四国町の統一教

会（ユニテリアン教会）で内ヶ崎作三郎牧師（早稲田大学教授）から授けられたが、譲治は卒業後、教会に継続的に通うことはなかった。翌一九一三年に、譲治は肺炎カタルにより茅ヶ崎の南湖院に入院し、そこで妻となるナミ子に出会う。ナミ子は、熱心なクリスチャンの家庭に生まれ幼児洗礼を受けており、プロテスタント教会で信仰を育んでいた。新婚当初の二人は祈りの習慣を持っていたが、ナミ

子のみ富士見町教会に通っている。三人の子は洗礼にまでは導かれていないが、正男は、芹屋に住んだ幼年時代、「私は家から歩いて三十分ほど離れた山の上のキリスト教の幼稚園に通っておりました」と述べ、西池袋では「私が小学校の三年生になると、母は、私を目白の福音教会の日曜学校に連れて行きました」「私の心の中にキリスト教が溶け込んでいるのは、そのようなことからだと思います」（『地袋からの贈り物―坪田譲治・正男遺稿書簡集』二〇〇六年十月 びわのみ文庫）と記している。正男は聖書に対する考えを譲治と家庭内で述べ合う機会はいしばあったという（妻・キネ子の証言による）。キネ子は、正男の聖書に関する関心について「最近は独自で聖書の翻訳に携わっていた。亡くなったあと、手文庫二つに大事そうに聖書が入っ

ていた。一箱にはラテン語、フランス語、英語、一箱には日本の聖書に関する本が入っていた。／洗礼こそ受けてはなかったが、信者の両親に育てられた夫が、晩年聖書の学習研究をしていたことは肯けるものがある。（坪田キネ子「随筆」文庫のおじさん／夫・坪田正男を偲んで）『地袋からの贈り物』と書いている。

一方、清子は「私はクリスチャンではありませんが」と述べつつ「明治のはじめ女の人がキリスト教の影響をうけた時、新しい人生の方向を知り、立ちあがったのを私はとてもよかったと思っています」と評価し、クリスチャンが近代女性の人権意識と行動を促したと認識している。清子は、そうしたいから「岡山近代女性史研究会」で「大西絹さんはじめ、角谷小梅などクリスチャンとしてすぐれた女性」を世に広く伝える活動をしていることを正男に報告している。

11 一九八二年十一月三日、色川大吉を迎え自由民権百年記念集会（岡山県総合文化センター、現・岡山県天神山文化プラザ）が開催された。この会で岡山女性史研究会会員の香山加恵が、「岡山女子懇親会」について発表した。

12 「岡山女性史研究会」の誤記。一九八二年五月二十一日



岡山大学の広田昌希教授の指導により、岡山女性史研究会が発足し、清子は代表として参加した。この成果は、一九八七年八月に岡山女性史研究会編『近代岡山の女たち』（三省堂 監修永瀬清子・ひろたまさき）として刊行され、清子は、岡山教会の創立と山陽英和女学校の創設に携わった生き方に言及した「足袋の裏みせず―大西絹」を寄稿した。この他に同会の編者には、『岡山の女性と暮らし「戦後」のあゆみ』（一九九三年四月 山陽新聞社）と、『岡山の女性と暮らし「戦前・戦中」のあゆみ』（二〇〇〇年五月 山陽新聞社）がある。

13 福田（景山）英子（一八六五年・一九二七年）。清子は、一九六六年四月、岡山市笠井山公園（現在は生誕地の岡山市北区野田屋町公園に移設）の福田英子記念碑（揮毫 平塚らいてう）建立に尽力した。

14 清水紫琴（一八六八年・一九三三年 本名トヨ）は、清子らが結成した岡山女性史研究会による『近代岡山の女たち』「第一章 三 女権の拡張めざして―清水紫琴」で紹介されている。

15 坪田理基男（一九二三年・二〇一四年）は、讓治の三男。

【永瀬清子あて坪田理基男書簡】 赤磐市教育委員会蔵  
書簡①一九八七年二月二十三日

「消印」〔二字不明〕谷 62・2・23 18―24

「封書」日本郵便六十円切手貼付

「筆記具」黒インク

「封書表面」岡山市南方3丁目（以下は略す）／永瀬清子様

「封書裏面」（住所印）東京都東久留米市学園町一丁目（以下は略す）／坪田理基男（電話番号は略す）

「用箋」コクヨ灰色罫15行便箋 二枚

「その他」封筒裏面の住所、氏名、電話番号印は青スタンプ

〈第一葉〉

永瀬清子様

岡山での受賞式の折には（注1）、大変失礼致しました。

先生には、その後お元気でいらつしやいますか。

二月二〇日、今村葦子「ふたつの家のちえ子」の（注2）受賞祝賀会がありました。大変盛会でした。

先生がお見えでなかったのが残念でございました（注3）。

良い文学賞になり、遺族としてとてもうれしく存じております。先生には、何かとお世話様になり本当に有難うございます。厚

く御礼申し上げます。

東京においでの際は、おついでがありましたら是非お立寄り下さいませ。私の家は、池袋から西武線で行くのですが、ひばりが丘という駅で下車します。

#### 〈第二葉〉

自由学園のすぐ近くです<sup>注4</sup>。一度自由学園をご覧下さいませ。お迎えにまいります。

先生のご健康お祈り申し上げます。ご一興までに絵はがき同封致しました。夢二の絵です。

坪田理基男

敬具

二月二十二日

注1 第二回坪田譲治文学賞贈呈式。一九八七年二月七日に岡山市立中央図書館で開催された。

2 第二回坪田譲治文学賞受賞作品。本作は、第三十七回芸術選奨・文部大臣新人賞、第二十四回野間児童文芸推奨作品賞も受賞した。

3 坪田譲治文学賞は、受賞作品決定後、岡山市が市内で贈呈式を開催したのち、受賞作品の出版社と共催で東京都内での祝賀会を開催していた。清子は、第二回坪田譲治文学

賞贈呈式に参加して理基男に会ったが、東京での祝賀会には欠席したことがわかる。二月二十日の祝賀会は、岡山市、岡山市文学賞運営委員会、株式会社評論社の共催により、レストランキャッスル（千代田区）で開催された。

4 自由学園は一九二一年に西池袋で創立したが、この明日館のある敷地は出版関係に使用し、学校関係は一九三年に東久留米市の南沢キャンパスに移転した。三男の理基男は結婚を機に、東久留米市の自由学園に近い地に新居を構えた。譲治は一九五六年九月にその敷地の一隅に自身の離れの家を新築して書斎兼住居とし、西池袋の自宅および「びわのみ文庫」は、仕事場兼来客対応の場として昼間通った。理基男の妻・陽子は自由学園で音楽を教える講師を務め、息子・真紀も同学園に通っていたことから、理基男は清子に近所でゆかりのある自由学園を紹介したいと考えたと思われる。

書簡②一九八七年十月十七日

〔消印〕東久留米 62・10・24 18—24

〔封書〕日本郵便六十円切手貼付

〔筆記具〕黒インク

〔封書表面〕岡山市南方3丁目（以下は略す） 永瀬清子先生

〔封書裏面〕（住所印）東京都東久留米市学園町一丁目（以下は

略す） 坪田理基男（電話番号は略す）

〔用箋〕コクヨ灰色罫15行 一枚

〔その他〕封筒裏面の住所、氏名、電話番号印は青スタンプ

永瀬清子先生

拝啓 ご無沙汰しております。いつも父の文学賞ではお世話様になり有難うございます。

この度は、「第12回地球賞」をご受賞になられおめでとうございます（注<sup>1</sup>）。御祝い申し上げます。

ご高齢にもかかわらずのご活躍敬服致しました（注<sup>2</sup>）。

先生の今後の一層のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

坪田理基男

十月十七日

注<sup>1</sup> 一九八七年十一月、詩集『あけがたにくる人よ』（一九八七

年六月 思潮社）で、詩誌『地球』の「地球賞」を受賞し、

翌年三月には文化出版局の雑誌『ミセス』の「現代詩女流

賞」を受賞した。

2 このとき清子は、八十一歳だった。

書簡③一九八九年一月二十七日

〔消印〕東久留米1・1・27 18―24

〔封書〕日本郵便六十円切手貼付

〔筆記具〕黒インク

〔封書表面〕岡山県岡山市南方3丁目（以下は略す） 永瀬清子

先生

〔封書裏面〕（住所印）東京都東久留米市学園町一丁目（以下は

略す） 坪田理基男（電話番号は略す）

〔用箋〕コクヨ灰色罫15行便箋 二枚

〔その他〕封筒裏面の住所、氏名、電話番号印は青スタンプ

〈第一葉〉

永瀬清子先生

先日一月一〇日文学賞の運営委員会の折には、先生に、久しぶりお目にかかれ嬉しく存じました。

また、この度は、自由学園の岡本様におことづけになられ「あけがたにくる人よ」（注<sup>1</sup>）をご恵贈下さり誠に有難うございました。早速、読ませて頂きました。

淋しく、悲しくでも美しい詩で心がおちつきまます。これからも一篇ずつゆつくり鑑賞させていただきます。

厚くお礼申し上げます。なお、運営委員会の折に、一冊余分に頂戴しておりますので、二月四日、文学賞の受賞式の折にでもお返しに持参いたします。

暖い日が続いておりますが、どうかお体ご大切になさつて下さいませ。

# 〈第二葉〉

これからも、益々お元気で、素晴らしい詩をお書き下さることお祈り致します。

平成元年一月二十七日

坪田理基男

敬具

注1 「びわのみ文庫」から寄贈された「坪田譲治コレクショ  
ン」蔵の著書四冊のうちの一冊に詩集『あけがたにくる人  
よ』がある。この本には「永瀬清子より／坪田先生へ」と  
署名され、「びわのみ文庫」の住所印が押されている。本  
書簡の記述から推測すると、この詩集は、理基男が本書簡  
で「一冊余分に頂戴しております」と述べた一冊が理基男

から正男に渡され、「びわのみ文庫」蔵になった可能性も  
考えられる。

書簡④一九九一年「八月」

「封書」封筒なし

「筆記具」黒インク

「用箋」コクヨ灰色野15行便箋 一枚

# 〈第一葉〉

永瀬清子先生

拝啓 先日はご丁寧なお手紙で拙い小生の文章に(注1)、ご  
感想をいただき、また「女人随筆」大阪朝日掲載の「夏の朝」  
(注2)をお送り下さり、誠に有難うございました。

大変にお礼がおそくなり失礼いたしました。

「女人随筆」の「わが旅的一幕」では(注3)、父の文学賞のた  
めに(注4)、先生が大変な想いをされてご上京なさつておられ  
るご様子が、良く描かれており、遺族の私にとりましては、  
恐縮のあまり身のすくむ思いで、申し訳なく存じます。

どうか、先生には、無理をなさいませんようにお願いいたしま  
す。また、同文中、小生にもふれられ、光栄に存じます。「夏の朝」、

時の流れ、遠い昔を想わずにはられない寂しく、美しい詩で感銘深く読ませていただきました。

注1 『二せきの魚雷艇（現代の民話・戦争つてなあに8）』（国土社 一九九一年七月）のことか。

2 一九九一年八月二日付『朝日新聞』夕刊（朝日新聞大阪本社）に掲載された詩「夏の朝一時すぎ友も去ったのに」のこと。佐藤惣之助が主宰した詩誌『詩之家』同人の岩田潔について調べている齊藤建治が、一九九一年七月九日に岡山市の自宅まで訪ねてきたことを書いた詩。齊藤建治は、雑誌『愛知文学』の同人で、連載「来し方の詩集『愛日抄』の岩田潔追懷」（『愛知文学』一九九一年十一月）でこの日のことを詳述し、詩「夏の朝」については、連載「（時すぎ友もさったのに）岩田潔ノート」（『愛知文学』一九九三年七月）で言及している。また、この日に撮影した清子の写真は、遺稿詩集『春になればうぐいすと同じに』（一九九五年四月 思潮社）の扉頁に使われた。

3 『女人随筆』（一九九一年五月）に寄稿した随筆「わが旅の一幕―過去から未来への―」には、一九九一年一月七日から八日まで上京し、岡山市文学賞運営委員会、吉備高原学

園高等学校の校歌を作曲する小六禮次郎との打ち合わせ、日本現代詩人会主催「'91岡山の詩祭」の打ち合わせ、従姉とその娘との面会について書いている。「去年は私の身体の調子がわるく、その上京でかなり疲れたし」と岡山市文学賞運営委員会のための上京で疲れたことにふれ、さらに一昨年の旅行のけがで足が弱くなり「上京は無理じゃないか、と案じていた」ことを述べている。

4 第六回坪田譲治文学賞のこと。

書簡⑤一九九一年九月二十九日

「消印」 東久留米3・9・29 12―18

「封書」 日本郵便六十二円切手貼付

「筆記具」 黒インク

「封書表面」 岡山市南方3丁目（以下は略す） 永瀬清子先生

「封書裏面」（住所印） 東京都東久留米市学園町二丁目（以下は略す） 坪田理基男（電話番号は略す）

「用箋」 コクヨ灰色野15行

「その他」 封筒裏面の住所、氏名、電話番号印は黒スタンプ（第一葉）

この度は、数々の内容のあるすばらしいお便りをいただき、厚

く御礼申し上げます。

小生、三男で末つ子でございます<sup>(注1)</sup>。先生のおつしやる弟とは、長男の兄のことと思いますが、生前の父が、作家志向の私に、父の著作権継承者になるようにと、私共兄弟三人に申し残しましたので、文学関係は、私がやらせていただいております。どうか、今後ともよろしくお願いいたします。

台風が、つぎつぎとまいり、不順な天候が続いております。岡山の方では如何でございましたか、お見舞申し上げます。また、先生にはお身体くれぐれもご大切になさつて下さい。来年、岡山に参りましたおりお目にかかるのを楽しみにしております。昨日、ある会に出席いたしましたら、ばったり、丘修三さんにお目にかかりました<sup>(注2)</sup>。先生の地球賞ご受賞のときのお話をしましたら、とても嬉しそうに、そのときのお話をして下さいました。

## 《第二葉》

文学賞の方は、戻ってきたアンケート<sup>(注3)</sup>の整理が終わりましてので、明日（九月三〇日月曜日）予備選考委員会を開きます。すぐ一〇月で、一年中で一番良い季節ですが、どうかご大切に、重ねてお願いいたします。

敬具

一九九一年九月二十九日

坪田理基男

## 注1

譲治の長男・正男、次男・善男、三男・理基男のうち、理基男が著作権継承者となっている。理基男は、超教派的キリスト教家庭雑誌『ニューエイジ』の編集者であった時代に、父譲治の推薦によつて壺井栄『二十四の瞳』を同誌に連載し世に送り出すことを実現させた（一九五二年二月～十一月号・十回連載）。一九六九年以降、『びわの実学校』同人となる。児童文学作家としては『絵をかくはと』（一九七二年四月 ポプラ社）、『にせアカシアの花』（一九七二年十一月 金の星社）ほかの作品を書き、主婦の友社からは『二せきの魚雷艇』（一九九一年七月 主婦の友社）などの執筆を手がける。父・譲治の作品に関わる坪田一族について調査・執筆した著書『坪田譲治作品の背景 ランプ芯会社にまつわる話』（一九八四年四月 理論社）も出版した。

ここで、清子がこの理基男書簡を読むまで、理基男が長男であると誤認していたことがわかる。清子にとって、著作権継承者である理基男は、正男の兄だと思込んでいたようであるが、その誤解に気づくきっかけとなるような清

書簡⑥ 一九九一年十一月十六日

〔消印〕 東久留米 3・11・16 12―18

〔葉書〕 日本郵便四十一円縦罫はがき10行

〔筆記具〕 黒インク

〔その他〕 住所、氏名、電話番号印は黒インク

〔葉書表面〕 岡山市南方三丁目（以下は略す） 永瀬清子先生（住所印）東京都東久留米市学園町一丁目（以下は略す）

坪田理基男（電話番号は略す）

〔葉書裏面〕

秋らしい天気になりましたが、お元気ですか。

足の方は、如何ですか、お見舞申し上げます。

文学賞の候補もきまりました<sup>注1</sup>。近日中に、市の教育委員

会の方へお送りします。

先生には、運営委員としていつもお世話様になり有難うございます。

さて、父が、戦前からよく行っておりました信州の野尻湖<sup>注2</sup>の方へ行ってまいりました。小林一茶の古里です。野尻湖の辺では、寒くてとれませんが、峠一つ越えたと、リンゴの産地です。お見舞に少量ですがお送りいたしました。お納めいただければ幸いです。

注1 一九九一年度、第七回は、江國香織の『こうばしい日々』

（新潮社）が受賞した。

2 譲治は、一九三九年四月に『子供の四季』により新潮社文学賞を受賞した頃、ようやく作家としての余裕が生まれたことから、初めて野尻湖を訪れ、以後、故郷の感じがするこの地が気に入り毎年のように釣りに訪れるようになった。一九四五年四月には、野尻湖畔の民家を買いて疎開した。現在、野尻湖畔の家屋跡（長野県上水内郡信濃町野尻）に、「坪田譲治記念碑」が建てられている。理基男も若い頃から同行してこの地に親しみ、のちに別荘をもったことから、譲治没後によく訪れていた。

書簡⑦一九九四年八月(二十) 日

「消印」 東久留米 6・8・(20) 18—24

「葉書」 日本郵便 五十円縦罫はがき10行

「筆記具」 黒インク

「その他」 封筒裏面の住所、氏名、電話番号印は黒インク

「葉書表面」 岡山市南方三丁目(以下は略す) 永瀬清子先生(住所印)

所印) 東京都東久留米市学園町一丁目(以下は略す)

坪田理基男 (電話番号は略す)

「葉書裏面」

暑い日が続いておりますが、先生には、お元気でお過しでしょうか。

先日は珍しい「鮮魚粕漬」をお送り下さいまして有難うございました。

丁度、食べごろになりましたので、二三日前より賞味させていただきます。

今年の二月は(注1)、先生に、坪田賞の運営委員で大変お世話様になつておりましたので、お見舞かたがたお伺いしましたが、この様なお心遣いitadくなど恐縮です。今後は、どうか、ご放念下さい。秋の気配がしてまいりましたが、ご大切に

注1 「今年の二月」とは、第九回坪田譲治文学賞の贈呈式が

行なわれた一九九四年二月五日(岡山市役所市庁舎内)。

清子は、一九九一年度で運営委員の任期を終了しているため、本書簡の一九九四年八月時点では辞任をしている。

# 解題

## 生前の譲治と清子

本稿では、譲治の長男・正男と、三男・理基男が、清子との交流をした跡を辿ることができる書簡を翻刻した。その交流に先駆けて押さえておきたい点は、生前の譲治と清子の関係についてである。

二人の直接的な出会いとしては、現時点で見出すことのできる資料はないが、間接的に清子の譲治に対する思いがわかる文献について三点注目したい。

一点目としては、清子は、一九三五年八月に発表した「同人雑誌総評」(『婦人文藝』)で、同年七月に発表された譲治の小説「赤い馬」(『早稲田文学』)に言及している。清子は



一九三五年七月号の『早稲田文学』を「かなり優れたものを集めてゐる」と捉え、同誌で取りあげた五作品のなかでも一番に譲治の小説「赤い馬」を評価している。清子は、本作を「これはいつもの子供を主題としたものでなく」と把握していることから、それ以前の譲治の童話や子供を主題とした小説を読んでいたことがわかる。また清子は、主人公の男性教師の「自由に對するあこがれ」に注目し、「彼が欲する自由と云ふものは、階級的にプロレタリアが考へるやうな自由とは、はるかにより本能的な自由である」と述べている点に、自由に関する思想への理解が注がれているといえる。しかしながら、まだ接点をもたない作者譲治への思いは生まれていないと考えられる。

二点目は、一九五八年八月に出版された『宮澤賢治研究』（筑摩書房）である。この本には坪田譲治「宮澤賢治の童話について」と永瀬清子「農民詩としての宮澤さんの作品」が掲載された。本書は、草野心平の編集により、また賢治の弟・宮沢清六（一九〇四年・二〇〇一年）が譲治と清子の共通の知人として執筆している。

清六が両者それぞれと関わりをもち始めたのは、この時代からさらにさかのぼって、一九三三年九月における賢治の死後までもなくである。清子は、生前には会うことがなかった賢治の死

後までもなく、草野心平の導きにより一九三四年一月に発行された『宮澤賢治追悼』（次郎社）に「宮澤賢治さんの空気を寄せた。その翌二月に、清六は新宿「モナミ」での「第一回宮沢賢治友の会」の開催に合わせて上京し、清子と初対面した。それは、期せずして賢治の「雨ニモマケズ手帳」の発見の場となった。こうして清子は、賢治への詩と思想および実践への思いを深め、賢治に寄せる文章や詩の発表を手がけるほか、戦後は、自ら賢治の意志をつぐみ思いで現赤磐市にある松木の実家で農婦として詩作と労働の生活を始めた。

一方、譲治は、賢治の没年である一九三三年およびその後数年内では、『赤い鳥』に数多くの童話を発表しつつも未だ作家として世に広く認められていない時期である。その後、先の小説「赤い馬」発表と同年となる一九三五年発表の小説「お化けの世界」（『改造』）を皮切りに、一九三六年の「風の中の子供」（『東京朝日新聞』連載）と、一九三八年の「子供の四季」（『都新聞』連載）によってようやく文壇における不動の立場を保つようになる。特に「風の中の子供」の映画化をはじめ、譲治文学の演劇も上演されるようになる時期に、東京での子育て時期にあった清子は、そうした譲治の情報を得ていったと思われる。こうした譲治の活躍時期から、賢治の弟・清六は、賢治童話

の子どもたちへの普及に關して讓治を頼り、ともに子ども向けの出版企画を進めた。讓治があとがきを添えた賢治の本では、一九三九年十二月刊の『風の又三郎』（羽田書店）と一九四一年十二月刊の『銀河鉄道の夜』（新潮社）が出版された。讓治は、前者のあとがき「この本を読まれた方々に」を「昭和十四年初冬／野尻湖畔にて」子供に呼びかける文体で書き、後者の「あとがき」では、賢治の作品が「全集の他に、この三年の間に三冊の本になつて出て居りますし、近くまた二冊ほど出ることになつて居ります。是非お読みになるようおすゝめ致します」と宣伝している。

こうした讓治と清六の關係は、後年一九七〇年、讓治が八十歳の年に『びわの実学校』編集同人らと岩手県花巻を訪れた際に、清六に案内され、賢治と高村光太郎の遺跡をめぐるという旅の実現にもつながっている。

このように賢治文学をめぐる、清子は詩の方面から、讓治は童話の方面から、弟・清六と直接關係する機会を得るなかで、それぞれがお互い、賢治没後の作品の普及と継承に努めている關係であることを認めていたと察せられる。

次に、三点目に移り、先の『宮澤賢治研究』（筑摩書房）を出版した一九五八年八月の翌年である一九五九年二月に、讓治

が編集担当となった『少年少女文学風土記ふるさとを訪ねて（Ⅱ）岡山』（泰光堂）に清子の詩が掲載されている点に注目したい。そこには、岡山の作家が名を連ねるなか、戦後岡山に戻った生活を続けて十年以上を経た清子が、詩「美しい三人の姉妹」を掲載している。これは、岡山県の三大河川である吉井川・旭川・高梁川を「姉」「中の妹」「末の妹」と捉え、それら岡山の川が郷土を豊かにうるおすさまを描いたものである。この掲載に至る二人の直接的なやりとりは確認できないが、讓治もまた岡山の川を愛して育ち、随筆はもちろん童話のなかにもしばしば明治三十年代の岡山の川から広がる豊かな光景を描いていることを、清子は認識していただろう。（山根 知子）

### 讓治没後の坪田讓治文学賞

坪田讓治文学賞は、「本市出身の児童文学作家で岡山市名誉市民でもある坪田讓治氏の偉大な業績を称えるとともに市民文化の向上に資することを目的として設けた賞」である（『市民のひろばおかやま』一九八五年四月十五日号）。

そこで、岡山市文学賞の一部門である坪田讓治文学賞制定の経緯を確認しておきたい。岡山市は、一九七九年九月に讓治に

岡山市名誉市民の称号を贈り、その名誉を表彰している。翌一九八〇年三月には「新総合計画策定資料」を準備し、このうち、『みんなであすの岡山を考える』市民意識調査結果報告書岡山市新総合計画策定資料4（一九八〇年三月）では、「(2)まちづくりへの提言事項」の項目「文化環境の創造 市民文化」に「郷土の歴史と文化を掘りおこすとともに、それを市民の心に還元する努力をおしまぬこと」をあげた。こうした策定資料に基づき、一九八二年四月に岡山市企画室編『岡山市新総合計画 総合文化都市おかやまの創造をめざして 基本構想・基本計画』（岡山市）が策定されている。ここで「第七章 香り高い市民文化を育てるまちづくり 第一節 豊かな文化環境づくり」の「計画」には、「3文化活動の振興(3)芸術文化活動の振興」に「創作童話を対象とする坪田譲治文学賞を制定して、岡山市文化奨励賞とともに顕彰機会の充実をはかる」と、坪田譲治文学賞制定の構想が盛り込まれたのである。

岡山市新総合計画には、「生涯学習の振興」のための「学習施設の整備」もある。一九八三年四月二十七日に岡山市立中央図書館が開館し、二階には常設展示で坪田譲治展示コーナーがあり愛用品や屏風などが飾られた。開館した翌五月二十九日には、市立図書館友の会主催の講演会が開催され、清子は、「読

書のよろこびー坪田譲治先生を通じて」と題し書簡1にあるように「子供の四季」、「風の中の子供」など譲治の作品について話した。

「6月定例市議会質疑要旨（一般質問）教育関係」（『岡山市政だより』一九八三年十月一日号）より岡山市議会会で「①岡山市名誉市民であり児童文学者の坪田譲治賞が新総合計画の実施計画の中に組まれているが、これはどういうことをするのか②その生家の保存や児童文学館の併設などにより市の文学を発展させる考えはないか」の質問に対して、「①全国のトップを切つて、市民の童話を募集し、優秀作品に賞を出しているが、この市民の童話の募集を今後どのように広げていくか、研究していきたい②文化財というのではなく、別の観点から保存する方法がないか調査したい」と回答しており、譲治の顕彰について様々な観点から検討が進んでいることがうかがえる。たとえば、譲治の三回忌にあたる一九八四年七月七日には、岡山市立中央図書館前庭に坪田譲治文学碑を建立し除幕式が行われたことも、その一環といえよう。

続いて岡山市企画室編集『岡山市新総合計画実施計画（昭和59年度～昭和61年度）』（一九八三年十二月 岡山市）の「第8章 生活に根ざした市民文化が育つまちづくり 第1節

市民文化の創造」には、「施策の体系」に「市民文化の創造文化活動の振興」のひとつとして「坪田譲治賞（仮称）の制定」があげられ、「事業計画」には、「事業費」として「10,500千円」の計上とともに次の通り記載されている。

岡山市出身の児童文学者、故坪田譲治氏を記念するとともに市民の創作活動を奨励するため、これまで市民を対象に募集し、優秀作品を発刊している「しみんのどうわ」をさらに発展させ「坪田譲治賞」（仮称）を制定する。

・事業調査、条例の制定  
・創作童話の募集

これら岡山市の事業計画を受け、書簡1に「私もその委員の中へお加えいただきたい」とあるように、清子は一九八四年二月二十七日に制定に向けての会議に出席したことがうかがえる。このように制定の準備を進め、一九八四年十二月の岡山市議会で岡山市文学賞条例（岡山市条例第四十五条）が制定され、同年十二月二十五日に施行された。

そして岡山市から清子のもとへ、運営委員の依頼ならびに第一回岡山市文学賞運営委員会開催についての文書が届き、

一九八五年一月二十五日にレストランキャッスル（千代田区）で第一回岡山市文学賞運営委員会が開催された。

以来清子は、一九九一年度、第七回まで運営委員として岡山市文学賞に携わった。運営委員の務めでは、毎年一月に東京で開催される坪田譲治文学賞の選考委員会と運営委員会、翌二月または三月に岡山で行われる贈呈式と東京で催される祝賀会への出席をはじめとして、岡山市文学賞全般の運営を担った。

なお、坪田譲治文学賞を含む岡山市文学賞の主管課は、一九八五年度、第一回から岡山市教育委員会事務局社会教育部文化課で、『おかやま市民のひろば』（二〇〇〇年五月）にあるように、二〇〇〇年四月一日付の機構改革で、二〇〇〇年度、第十六回からは岡山市企画室文化政策課（現・文化振興課）に移管している。

（白根 直子）

### 清子の「岡山の近代文学館」への働き

清子は、岡山県出身の文学者の資料を保存し後世に伝えていくために、書簡1にあるように「岡山の近代文学館が要ると思って」いた。そのため清子は、「岡山近代文学館をつくりたいー井出訶六のことから」（『おかやま同郷』一九七六年九月）や、

「郷土の近代文学館」(『きび野』一九八一年六月)などを寄稿し、各方面にその必要を訴えていた。

かねて岡山県には明治以来、数多くの文学者がでているが、彼らに対し、私達郷土の者はあまりにも冷淡であると思っていた私は、いつかは岡山近代文学館をつくり、その人々のことを知り、その作品を研究するために役立つものにし、ひいては県民の財産にすべきだと思っていた。

井手訶六の遺稿の焼失につけても、つまりは一般に文学の値打ちをみとめていない事に原因があり、人々はその価値を知らずに散逸させてしまい、又、有名な人の場合はお金になるため却って売買により行方がわからなくなる。そうした事をふせぐため何とかして時の過ぎてしまわぬうちに希望実現の緒につかなくてはならない。

木下利玄、正宗白鳥、内田百閒、坪田譲治、と指を屈す人はすぐ両手にあまる。彼らを研究するため岡山人としてなすべき仕事がいりある、さらに薄田泣菫、有本芳水、木山捷平があり、巾を拡げて永井荷風、井伏鱒二、小山祐士もほつてはおかれない。

考えれば一人二人の力でできる事でなく、又、私はあま

りに無力であると思つては時が過ぎた。しかし、今をはずせば更に実現は困難になる。

時代と共に文学研究の道も次第に広く深くなるが、求める人の力量がました時に、資料がなくなっていたらおよそ情ない。今出来るだけ集めておけば必ずのちの人に喜ばれると思ひ、近代文学館の夢を一步でも発足させたいと思ひつづけている。

(「岡山近代文学館をつくりたい―井手訶六のことから」)

こうした思いを抱いた一端には、一九六七年の日本近代文学館や、一九六八年の石川近代文学館の開館があるだろう。「郷土の近代文学館」には、石川近代文学館の開館や、日本近代文学館設立の発起人に名を連ねた吉田精一、矢野峰人らに「岡山近代文学館」開館へのはたらきかけをしたことを述べている。とりわけ石川近代文学館は、開館に尽力した新保千代子が、清子の卒業した石川県立第二高等女学校の後輩であり、愛着ある金沢という点でも、先例として意識していたといえる。

このように先達の岡山の文学者の顕彰と資料の保存を願う清子にとって、坪田譲治文学賞は、譲治の「文学の値打ち」を知らしめることになるため、書簡1にあるように「とてもうれ

### おわりに

しく／＼思っています」と述べたのであろうし、一九八六年十一月の吉備路文学館の開館はその喜びをいっそう大きくしたと察せられる。その初代館長は、山本遺太郎（一九二一年、二〇〇一年）で、第一回から坪田譲治文学賞選考委員を務めた。戦後直ちに発行した雑誌『文学祭』や『詩作』には、清子も寄稿した。また清子は、一九九一年十一月の吉備路文学館開館五周年記念式で同館の発展に寄与したことにより感謝状を授与された十人の一人でもあった。清子の次女・井上奈緒は学芸員として勤務しており、たとえば、一九九四年三月四日付岡山日日新聞に「消息文にみる吉備路文人のころ」藤原審爾から坪田譲治への封書」の寄稿があり、譲治資料の活用がわかる。岡山市立中央図書館とともに、資料の収集・保存・活用に努める吉備路文学館が開館したことで、譲治顕彰の機運がここでさらに高まり、本学や岡山シテイミュージアムも加わった現在の多岐にわたる譲治顕彰につながってきたといえよう。顕彰の礎となる譲治の資料が、岡山市と吉備路文学館での保存・活用につながった背後には、清子の尽力もあったことがうかがえる。（白根 直子）

以上、永瀬清子と坪田遺族の交わした合計七通の書簡をめぐって、「はじめに」で示した研究の観点から多岐にわたる重要な文学的考察に及ぶことができた。それらの観点は学問的な進展に寄与する成果はもちろんであるが、それだけにとどまらず、ここに浮かび上がった清子の文学に対する思想と実践は、現代人の文学に対する考え方や動きに一石を投じている。

なかでも譲治と清子が、生前にはほとんど知られていなかった宮沢賢治の評価と普及に努めたように、清子は譲治の没後、同じ岡山というふるさとを描いた譲治文学を地元岡山に根づかせ、全国にも発信する坪田譲治文学賞を支えたことは注目に値する。そうした行動から、人の深奥からほとばしり出た言葉による文学の力が、いかに人々の生を支え心豊かにするものであるかという「文学の価値」を、清子自身が実感するがゆえに、「一般に文学の値打ちをみとめ」、時と場を超えて共有できるようにその地域の「財産」とされるべきだという主張が立ち上がってくる。

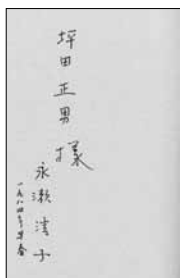
折しも二〇二三年度では、岡山市が文学部門で「ユネスコ創造都市ネットワーク」への加盟申請をしており、坪田譲治文学

賞の継続をはじめ、「文学によるまちづくり事業」をさまざまなに進めてきたなかで、日本ユネスコ国内委員会による審査を経て、本稿投稿時点で文部科学省より岡山市の申請が国内で承認されたとの通知があった。

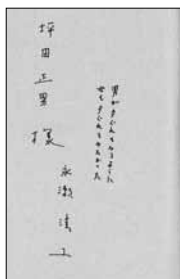
清子の主張は、まさにこうした現代において、文学の真価を知り文学を生きる支えとして広めようとする人々の動きに力を与えてくれるものであるといえる。

また、今後の研究課題としては、清子の思いを実現させるために、山本遣太郎の譲治顕彰とのかかわりを明らかにすることで、譲治顕彰の実像がより鮮明になると思われる。山本遣太郎は、一九四八年、岡山県教育委員会発足とともに文化行政に携わり、戦後の岡山県の文化芸術を牽引した人物だからである。岡山市文学賞のように文化行政が果たした役割からも、岡山の文学顕彰のありかたを考える必要があるだろう。

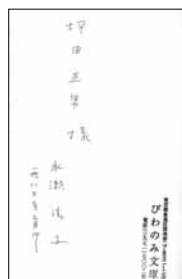
■永瀬清子の署名(本学附属図書館「坪田譲治コレクション」蔵)



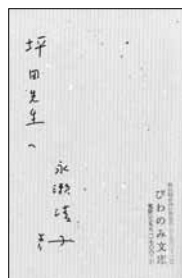
『うぐいすの招き』



『彩りの雲』



『私は地球』



『あけがたにくるひとよ』

※書簡発表に關して、永瀬清子のご息女の方井上奈緒氏と、坪田理基男のご子息で譲治の孫にあたる坪田眞紀氏には、公表の許諾とご協力を賜りましたこと、深謝申し上げます。

※書簡を所蔵する赤磐市教育委員会には、調査研究のご協力をいただき、感謝申し上げます。

※本学附属図書館には、「坪田譲治コレクション」所蔵の永瀬清子署名本四冊についての調査協力および写真提供をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

(やまね ともこ／本学教授)

(しらね なおこ／本学大学院博士後期課程修了・赤磐市教育委員会学芸員)

キーワード＝坪田譲治文学賞 岡山 文学顕彰

## 坪田譲治文学賞と永瀬清子

年	月	日	岡山市文学賞	坪田譲治文学賞受賞者	永瀬清子
1953	10	7	音楽・演劇・美術・文芸・スポーツなどの部門を設け、市民の創作活動を支援することを目的に「市民芸術賞（～1975）」		
1954	8	1	前年度受賞した審判員が好評につき『岡山市市民芸術創作賞第一基本計画～』に盛り込まれる		
1959			市民文芸研究会入選作品展『市民の文芸』（岡山市教育委員会）を発行する		
1972	3	5	『みんなのどうわ 1 岡山市民創作童話集』（岡山市教育委員会）を発行する		
1976	9	15			『岡山近代文学賞をつくりたいー井山啓六のことから』（『おかわり新聞』第10巻第9号）寄稿
1979	9	27	坪田譲治に岡山市名誉市民の称号を贈り、その名義を表彰する		
1980	3		岡山市新総合計画策定資料で『文化環境の創造 市民文化』に「郷土の歴史と文化を掘りおこすとともに、それを市民の心に還元する努力をおしまぬこと」があげられる		
1981	6	15			『郷土の近代文学館』（『きび野』第3号）寄稿
1982	4		岡山市企画室 編『岡山市新総合計画：総合文化都市おかわりの創造をめざして 基本構想・基本計画』（岡山市）が発行され、「創作進捗を対象とする坪田譲治文学賞を制定して、岡山市文化奨励賞とともに顕彰協会の充実をはかる」ことが盛り込まれる		
1982	5	21			岡山大学の広田昌希教授の指導により、岡山女性史研究会発足、代表として参加
1982	6				岡山女子懇親会について共同研究の分担を決める
1982	7	7	坪田譲治死去		
1982	11	3			色川大吉を招き自由民権百年記念集会が開催（岡山県文化センター）、岡山女性史研究会会員の香山加恵が「岡山女子懇親会」について発表
1983	3	4			坪田正男に面会
1983	4	27	岡山市立中央図書館開館		
1983	5	29			講演会「読者のようこびー坪田譲治先生を通じて」で「字俣の四季」「風の中の子供」など坪田譲治の作品について話す（主催 市立図書館友の会 岡山市立中央図書館）
1983	6		岡山市議会の一般質問で「坪田譲治賞」や市の文学を再興させる考えについての質問が出る		
1983	11	15			随筆集『うぐいすの招き』（れんが書房新社）刊
1983	12		『岡山市新総合計画実施計画（昭和59年度～昭和61年度）』に「市民文化の創造 文化活動の振興」のひとつとして「坪田譲治賞（仮称）の制定」があげられる		
1984	1	10			『彩りの雲一箱集4』（思軒社 装幀 谷川俊太郎）刊
1984	2	27	坪田譲治文学賞制定についての会議開催		坪田譲治文学賞制定についての会議出席
1984	3	5			坪田正男に書翰を送る
1984	7		坪田譲治の文学館が岡山市立中央図書館前棟に建立		
1984	12	24	岡山市定例会市議会で坪田譲治文学賞と市民の文化賞の二部門とする文学賞についての岡山市文学賞条例（市条例第45号）が制定される		



坪田謙治文学賞と永瀬清子

年	月	日	岡山市文学賞	坪田謙治文学賞受賞者	永瀬清子
1984	12	25	岡山市文学賞系列施行		
1985	1	12	運営委員の依頼ならびに第一回岡山市文学賞運営委員会開催についての文書を清子に送る		
1985	1	25	第一回岡山市文学賞運営委員会（千代田区・レストラフキャンパス）		出席 第七回（1991年度）まで運営委員を務める
1985	7	6	豊かな子どもの世界を広げようと坪田謙治文学研究会（「書太と三平の会」発足（石井小・小学校内「書太と三平の会」事務局）		
1986	2	9	第一回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市立中央図書館）	太田治子	出席
1986	2	21	第二回坪田謙治文学賞受賞記念祝賀会（千代田区・レストラフキャンパス）		
1987	1	10	第二回岡山市文学賞運営委員会		出席
1987	2	7	第二回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市立中央図書館）	今村薫子	出席
1987	2	20	今村薫子さん「ふたつの家のちえ子」 坪田謙治文学賞受賞記念祝賀会（千代田区・レストラフキャンパス）		欠席
1987	8	1			岡山女性史研究会編『近代岡山の女たち』（三省堂 監修ひろたまさき・永瀬清子）に岡山教会の彰立と山陽英和女学校の創設に携わった生き方を「足役の輩みせ」に一大西角に書く
1988	1	9	第三回岡山市文学賞運営委員会		出席
1988	2	6	第三回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式	丘修三	出席
1988	2	19	第三回坪田謙治文学賞受賞記念祝賀会（千代田区・レストラフキャンパス）		
1989	1	10	第四回岡山市文学賞運営委員会		出席
1989	2	4	第四回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市立中央図書館）	笹山久三	出席
1989	2	17	笹山久三さん「四万十川・あつしの夏」 坪田謙治文学賞受賞記念祝賀会（千代田区・レストラフキャンパス）		
1990	1	9	第五回岡山市文学賞運営委員会		
1990	2	3	第五回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市立中央図書館）	有吉玉青	
1990	2	16	第五回坪田謙治文学賞受賞記念祝賀会（千代田区・レストラフキャンパス）		
1991	1	8	第六回岡山市文学賞運営委員会（千代田区・レストラフキャンパス）		出席
1991	11	27			吉備路文学館開館5周年記念式で同館楽座に寄与したと感謝状を贈呈される
1991	2	16	第六回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市役所市庁舎内）	川重茂子	出席
1992	2	1	第七回坪田謙治文学賞・市民の電話賞贈呈式（岡山市立中央図書館）	江國善雄	出席

・この年譜は、坪田謙治文学賞の制定と永瀬清子のかかわりを示すため、岡山市企画室 編『岡山市新総合計画：総合文化都市おかやまの創造をめざして 基本構想・基本計画』（岡山市1982年4月）、山根知子、鈴木榮一編『人物誌大系 47 坪田謙治』（日外アソシエーツ 2022年6月）、『読入永瀬清子の生涯』（赤松市教育委員会館山分室 2009年3月）などを参照し作成した。

・年譜の期間は、岡山市文学賞制定の契機になった事項から永瀬清子が運営委員を務めた時期までとし、会議や式典の出席が判明しているところは、そのことも記した。